

学位論文題名

シュンペーターの経済・社会思想における創造性の位置

学位論文内容の要旨

本論文は、シュンペーターの経済・社会思想を、特に学説研究の観点から考察し、それが現代の経済学の諸問題の研究に対して持つ先駆的に重要な意義を確かめようとして書かれた。本論文は、シュンペーターの経済発展論を中心としつつも、哲学との関係(第1章)、社会学との関係(第2章)、倫理学との関係(第3章)、理論との関係(第4章)、実践との関係(第5章)を論じたものとなっている。

第1章では、シュンペーターの経済発展の概念、特に「創造性」の概念がベルクソンの創造的進化における創造性の概念と類似したものであることを論じた。シュンペーターの経済発展論は、次の5点にわたって創造的進化論との連関を有しているということができる。すなわち、第1に、創造的な変化、第2に、内生的な変化、第3に、非連続的で質的な変化、第4に、不可逆的な変化、第5に、変化の予見不可能性、である。こうして、シュンペーターの経済発展論とベルクソンの創造的進化論との類縁関係は、これまで一般に考えられていたよりもはるかに緊密なことが明らかとなった。シュンペーターの経済発展論にみられる経済進化の概念は、ケルムやホジソンの主張とは異なり、創造的な変化の原理としてのベルクソンの創造的進化論により親和性を持っているということができる。まさに、シュンペーターの経済発展論の基礎には、「創造的な変化」としての「経済発展」を説明するために、創造性を核とするベルクソンの創造的進化論と同じ説明原理があったのである。シュンペーターにとって発展は、創造性を前提とするのでなければ真に意味あるものではない。かくして、シュンペーターの経済発展論の根底にある洞察は、創造性にあるということができる。

第2章では、これまで論じられることがなかった彼の社会学における方法論がどのようなものであるのかをデュルケームと関連させることで明らかにした。シュンペーターの社会学的方法論は、個人を究極の实在として議論を始め、社会という集合体に固有の性質を演繹しようとする方法論的個人主義ではなく、集合体の实在性に優先権を与え、集合体が示す性質は個人に帰属する性質から演繹できないとする方法論的集合主義を採用していた。シュンペーターの「物の論理」という概念は、社会の中で個人の意識に対して外在性と拘束性を持つものを社会的事実であると規定し、その客観的な实在性ゆえに、社会的事実を「物のように考察する」という、第1の、そしてもっとも根本的な規

準を定式化したデュルケームの社会学的方法と類似したものであった。シュンペーターの採用した方法は、デュルケームの社会学における方法と同じものであり、彼の社会的分析に通底していたということが出来る。

第3章では、創造性を「かなめ」とするシュンペーターの功利主義に対する認識、すなわちこれまで論じられることのなかった彼の功利主義批判の考察にあてられている。企業者が惹き起こす革新は、事前には、まったく予見できないものであった。シュンペーターは、企業者の革新のように、快苦原則を核とする「功利の原理」の外部に存在するとでもいうべき行為が存在すると考えていただけでなく、事前には、誰によってもその価値を数値的に考量することができず、かつ外形的・数値的な証拠では基礎づけられない創造的な行為こそが経済の発展にとって最も重要な役割を果たしていると考えていた。シュンペーターの考える「創造」とは、既存の「ものさし」が意味をなさない現象を創り出すのであり、彼が功利主義を嫌悪していた理由も、その点に存在するといえよう。既存の「ものさし」で測れないということ、すなわち惹き起こされる現象がまったく予見できないということは、帰結を予見することができないということであり、当然にも、帰結主義の原理が機能しないことを意味する。したがって、企業者の革新は、いわば帰結主義の枠組みの外部に存在するといえるのである。創造性を最重要視するシュンペーターにとって、快楽という「ものさし」だけを使用し、帰結によって正否の判断を行なうというベンサム功利主義は、一面的であるがゆえに、浅はかなものとして映り、軽蔑することになった。

第4章では、シュンペーターの経済発展論における認識の視座構造の構成内容を問題とし、彼が「創造性」を最も基礎的で包括的なヴィジョンとしていたがゆえに、経済発展論における彼の「ヴィジョン」と「理論構成」との間には、本質的な悖理が闖入していることを明らかにした。シュンペーターが設定した経済発展論における動態の純粹モデル——第1次接近——の理論的枠組み内では、原理的に銀行家は革新を事前に審査できないということが明らかとなった。この陥穽は、発生論的な説明方法を採用したシュンペーターにとって、論理の要請からして、その構造そのもののうちに必然的に抱え込まざるをえなかったものであり、遠くは、彼の「ヴィジョン」と「理論構成」の相剋に淵源する。もちろん、シュンペーターの論理展開における矛盾が、彼の理論の価値を減じるものであると主張するものではない。というのも、この矛盾を通じてしか立つことができない視座があり、事前に予見できない革新への融資にまつわる問題を考える際には、この視座がわれわれに重要な分析を提供することになると思われるからである。過去の経済活動の結果としての貨幣資産や貯蓄を利用する機会が十分に確立していない現代の開発途上国などの企業者に対する銀行家の役割を再考するに際しては、われわれに重要な足場を提供するものになると思われる。また、銀行家に限らず貸し手の審査能力

およびモラルのあり方を再考するに際しても、われわれに重要な示唆を与える。

第5章では、前章の内容を踏まえた上で、シュンペーターの経済発展論からグラミン銀行を見ることによって、シュンペーターの経済発展論における融資のメカニズムとグラミン銀行の融資のメカニズムとを比較検討して論じることを試み、ひとつの現代的可能性として、従来の特許研究にはない解釈をくわえてみた。シュンペーターが構築した経済発展論の構図とグラミン銀行のマイクロクレジットのシステムとの間にはある種の類似性が存在していることが明らかとなった。この類似性は、シュンペーターの採用したオーストリア学派特有のユニークな説明方法、すなわち発生論的な説明方法に起因したものであるということができよう。発展のメカニズムについてのシュンペーターのヴィジョンは、発展という現象を説明するにあたって、最初に必要なのは、革新ではなく、金融であるという点で開発途上国の発展問題の核心を突いていたということができよう。本章では、このような観点からシュンペーターの経済・社会思想のひとつの現代的可能性について論じた。

かくして、本論文のように、ベルクソンを中心としたフランスの思想からシュンペーターを解釈する分析は、他の研究には見られないものであり、この視点に一番の独自性および意義がある。そして、このような視座に立つことによって初めて、シュンペーターの経済・社会思想における「創造性」の意味と位置が見えてくる。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 佐々木 憲 介
副 査 教 授 岡 部 洋 實
副 査 教 授 橋 本 努

学位論文題名

シュンペーターの経済・社会思想における創造性の位置

当該論文は、20世紀を代表する経済学者の一人であるヨーゼフ・アロイス・シュンペーター (Joseph Alois Schumpeter, 1883-1950) の経済・社会思想を考察し、その思想の根底に「創造性」という洞察があったことを明らかにしようとするものである。論文は、シュンペーターの経済発展論を中心に置いて、哲学との関係 (第1章)、社会学との関係 (第2章)、倫理学との関係 (第3章)、理論との関係 (第4章)、実践との関係 (第5章) を論じたものとなっている。

第1章では、シュンペーターの経済発展の概念、特に「創造性」の概念がベルクソンの創造的進化における創造性の概念と類似したものであることが論じられる。シュンペーターの経済発展論は、次の5点にわたって創造的進化論との連関を有している。すなわち、第1に、創造的な変化、第2に、内生的な変化、第3に、非連続的で質的な変化、第4に、不可逆的な変化、第5に、変化の予見不可能性である。楠木氏によれば、これらの点は、シュンペーターの経済発展論とベルクソンの創造的進化論との類縁関係が、これまで一般に考えられていたよりもはるかに緊密なことを示している。シュンペーターの経済発展論にみられる経済進化の概念は、ダーウィン主義的なものであるとするケルムや、生物学的アナロジーをまったく拒絶するホジソンの主張とは異なり、創造的な変化の原理としてのベルクソンの創造的進化論に親和性を持っているとする。シュンペーターの経済発展論の基礎には、「創造的な変化」としての「経済発展」を説明するために、創造性を核とするベルクソンの創造的進化論と同じ説明原理があったとし、シュンペーターの経済発展論の根底に創造性という洞察があった、という結論が導かれる。

第2章では、これまで論じられることが少なかったシュンペーターの社会学における方法論を、デュルケームと関連させて論じている。シュンペーターにとって、社会学はその知的生涯の始めから、経済学と並ぶ探究領域であった。シュンペーターは、社会学に関わる議論では、個人を出発点として社会という集合体に固有の性質を導こうとする方法論的個人主義ではなく、集合体に優先権を与え、集合体が示す性質は個人に帰属する性質からは導出できないとする方法論的集合主義を採用した。楠木氏によれば、シュンペーターの「物の論理」という概念は、社会の中で個人の意識に対して外在性と拘束性を持つものを社会的事実であると規定し、その社会的事実を「物のように考察する」という規準を定式化したデュルケームの社会学的方法と類似したものであった。シュンペーターの採用した方法は、デュルケームの社会学における方法と同じものであり、彼の社会学的分析に通底していたとする。

第3章では、創造性を「かなめ」とするシュンペーターの功利主義に対する認識が考察される。シュンペーターの場合、企業者が惹き起こす革新は、事前にはまったく予見できないものであった。企業者の革新は、快苦原則を核とする「功利の原理」の外部に存在する行為であるとともに、事前には誰によってもその価値を数値的に考量することができず、かつ外形的・数値的な証拠では基礎づけられない創造的な行為であり、これこそが経済の発展にとって最も重要な役割を果たしているとされていた。シュンペーターの考える「創造」とは、既存の「ものさし」が意味をなさない

現象を創りだすのであり、彼が功利主義を嫌悪していた理由はその点に存在する、と楠木氏は解釈する。既存の「ものさし」で測れないということ、すなわち惹き起こされる現象がまったく予見できないということは、帰結を予見することができないということであり、当然にも、功利主義が前提とする帰結主義の原理が機能しないことを意味する。したがって、企業者の革新は、いわば帰結主義の枠組みの外部に存在するといえるのであり、創造性を最重要視するシュンペーターにとって、快樂という「ものさし」を使用し、帰結によって正否の判断を行なうというベンサム功利主義は、一面的で浅はかなものとして映り、軽蔑することになった、と結論する。

第4章では、シュンペーターの経済発展論における「ヴィジョン」と「理論構成」との間には、本質的な悖理があることを論じている。シュンペーターが設定した経済発展論における動態の純粹モデル——第1次接近——の理論的枠組み内では、原理的に銀行家は革新を事前に審査できない。この陥穽は、発生論的な説明方法を採用したシュンペーターにとって、論理の要請からして、その構造そのもののうちに必然的に抱え込まざるをえなかったものであり、遠くは、彼の「ヴィジョン」と「理論構成」の相剋に淵源する。しかし、シュンペーターの論理展開における矛盾が、彼の理論の価値を減じるとはいえない。というのも、事前に予見できない革新への融資をめぐる問題を考える際には、この矛盾を伴う視座がわれわれに重要な分析を提供することになるからである。過去の経済活動の結果としての貨幣資産や貯蓄を利用する機会が十分に確立していない現代の開発途上国などの企業者に対する銀行家の役割を再考するに際しては、われわれに重要な足場を提供するものになる。また、銀行家に限らず貸し手の審査能力およびモラルのあり方を再考するに際しても、われわれに重要な示唆を与えるとする。

第5章では、前章の内容を踏まえた上で、シュンペーターの経済発展論における融資のメカニズムとグラミン銀行の融資のメカニズムとを比較検討し、ひとつの現代的可能性として、従来の諸研究にはない解釈をくわえている。シュンペーターが構築した経済発展論の構図とグラミン銀行のマイクロクレジットのシステムとの間にはある種の類似性が存在していること、この類似性は、シュンペーターの採用したオーストリア学派特有のユニークな説明方法、すなわち発生論的な説明方法に起因したものである。発展のメカニズムについてのシュンペーターのヴィジョンは、発展という現象を説明するにあたって、最初に必要なのは、革新ではなく、金融であるという点で開発途上国の発展問題の核心を突いていた。本章では、このような観点からシュンペーターの経済・社会思想のひとつの現代的可能性を論じている。

かくして、本論文のように、ベルクソンおよびデュルケームといったフランスの思想からシュンペーターを解釈する試みは、他の研究には見られないものであり、この点に独自性および意義がある。そして、このような視座に立つことによって、シュンペーターの経済・社会思想における「創造性」の意味と位置が明らかにされている。

以上、本論文でなされた広い範囲にわたる読解、独創的な貢献を高く評価し、本審査委員会は全員一致して、楠木敦氏から提出された学位請求論文が博士（経済学）の学位授与に値するとの結論に達した。